

鹿野勝彦著

## 『シェルパ——ヒマラヤ高地民族の二〇世紀——』

茗溪堂 2001年 277+A-9ページ

名 和 克 郎

## I

本書は、文化人類学者の手によるシェルパと「シェルパ」に関する民族誌である。「シェルパ」という語は、快活な笑顔をうかべてヒマラヤの高地で活躍する純朴で忠実なポーターというイメージとともに、世界中に広く流通している。また、チョモランマにほど近いネパールのソル・クンプ地方を中心に住むシェルパの人々は、過去50年にわたり多くの研究者の関心を引き付け、すでに十数冊の学術書と膨大な論文が刊行されている（本書を通じて、鹿野は民族範疇を指す場合シェルパ、高地ポーターを指す場合「シェルパ」という書き分けを行っている）。さらに、シェルパについて登山家や観光客、著述家の残した記録、ネパール政府やNGO、そしてシェルパを名乗る人々自身の発信した情報も膨大に存在する。こうした現状において、本書の意義は何処にあるのだろうか。

著者鹿野勝彦は、主に南アジアの諸社会において、生業や広い意味での経済活動に主要な焦点を当て、現地調査に基づく着実な研究を積み重ねてきた文化人類学者である。同時に彼は、ヒマラヤの高峰を目指して第一線で活躍した登山家でもあった。この2つの立場でシェルパと「シェルパ」に接する中で、鹿野は従来のシェルパ認識に潜む基本的な問題点を見出す。「シェルパ」が一般に思われているように単に純朴で従順な人々であるのなら、そもそも高地ポーターの中間管理職の仕事などできるわけがない。

『アジア経済』XLIII-5 (2002. 5)

一方人類学者のシェルパ研究の方は、最近まで「シェルパ」としてのシェルパを議論の中に充分取り込んでこなかった。本書において鹿野は、自らの四半世紀にわたるシェルパや「シェルパ」とのかかわりから得た知見と豊富な先行研究とを縦横に駆使し、このギャップを埋めようと試みる。それは、シェルパの生活全体を、内部の多様性と外部との関係の双方を常に視野に入れつつ歴史的経緯に沿って検討し、同時にシェルパのアイデンティティの構成や「シェルパ」となる選択自体をも再考に付すという、困難ではあるが魅力的な作業となった。

## II

あとがきと資料、冒頭の美しい写真ページを除き11章からなる本書の内容を、ここで目次に沿ってごく簡単に要約しておこう。

「シェルパ——忠実で勇敢なポーターのイメージ」と題された第1章では、今や主要国首脳会議の事務方の名称に転用されるまでに一般化した「シェルパ」という名前が、本来ネパールのソル・クンプ地方を中心に居住する人々の民族名であり、ヒマラヤ登山の高地ポーターとしての活躍を通じて人口に膾炙していった事実が確認される。「シェルパ」に対する登山家の賞賛はしかし、同じくネパールがらみの「グルカ兵」へのそれに類似して、西洋人の指示に従う忠実な東洋人に対するものであった。若い世代のシェルパの間にはこうした見方に対する反発が生じているが、「シェルパ」として観光産業で生活するためにはそのイメージをある程度は利用せざるを得ない。では、こうした葛藤を抱えつつも相当の成功を取ってきたシェルパや「シェルパ」の現状と、そこに至る歴史的過程はいかなるものであったのか。これこそ鹿野が本書全体をもって答えようとする問いである。

そもそも民族としてのシェルパは一体どのような人々なのだろうか。第2章「ソル・クンプ——シェルパの原郷」は、第1にヒマラヤ全体の地理と民族移動の中で、第2に南方からの具体的な道のりを通じてソル・クンプ地方を位置付け、豊富な先行研究

を駆使して、チベットからの移住、ネパール国家との関係、チベット仏教の展開といったシェルパの歴史と、制度的な平等性と競争原理というその社会的特質を簡潔に描く。ついで第3章「ヤクとジャガイモ——環境への適応と選択」は、シェルパ社会の移牧農耕の多様性を、鹿野自身が長年調査してきたロールワリンの事例をクンプ、ソルの両地域と比較する形で呈示する。だが、ジャガイモの導入をはじめとする変化にもかかわらず、農耕と牧畜のみでは、生態的にはより恵まれた中間山地帯に比して経済的に豊かなシェルパの生活を支えることはできない。今世紀中葉に至るまでそれを可能にしてきたのが、第4章「ヒマラヤ越えの交易——チベットとインドの仲介者」で取り上げられる交易である。シェルパのヒマラヤ交易は、塩や羊毛と穀物との物々交換を中心とする生活必需品確保のための農牧民によるものと、ナムチェ・バザールの住民らに見られる利潤追求型の専門的な大規模交易とからなっていた。専門的な商人はむしろ例外的だったが、そこで得られた富とともにシェルパの社会と文化のさまざまな側面に大きな影響を及ぼした。だが、20世紀中葉以降、南方からの物資の流入とチベット側の峠の閉鎖によりヒマラヤ交易は衰退することになった。

平等で競争主義的なシェルパ社会で、大きな資本を持たないため大規模交易者になれず、しかも一旗上げたいという意欲を持つ若者が活路を見出したのが出稼ぎである。第5章「ダージリンとネパール——近代との出会い」では、ヒル・ステーションとしてイギリス人により開発された茶のプランテーションを擁することになったダージリンの歴史と、そこでのネパール人移住者たちの社会の状況が概観される。ここにおいてシェルパは「シェルパ」として見出されていくのだが、その過程をヒマラヤ登山史の中でたどるのが第6章『『シェルパ』の誕生——ヒマラヤ登山の黎明期』である。「シェルパ」を見出した登山家とグルカ連隊の士官との関係が指摘される一方、忠実な東洋人を見事に演じてきた「シェルパ」側の事情が、限定された状況における選択の結果として説明される。

20世紀中葉、ネパールは外国の登山隊に門戸を開

き、世界の登山家が8000メートル峰初登頂を目指して鎬を削るヒマラヤ登山の黄金時代が到来する。この時期「シェルパ」の名声は不動のものとなるが、同時に「シェルパ」の主要な活動舞台がネパールに移り、やや遅れてその雇傭自体も多くはダージリンでなくネパール国内で行われるようになったことも見逃せない。他方、チョモランマの南に位置するソル・クンプには多くの登山隊が往来し、この地に暮らしていたシェルパの人々もまた登山へのかかわりを強めていく。1970年代以降のヒマラヤ登山の多様化とトレッキングの流行はこの傾向をさらに加速させ、同時に「シェルパ」自体のあり方をも多様化させていく。第7章「シェルパと登山・観光——ヒマラヤ登山の黄金時代から鉄の時代へ」が概観するのはこうした歴史的経過である。「シェルパ」としての雇傭とネパールとりわけソル・クンプの観光化は、大規模交易が衰退した20世紀後半のシェルパ社会に、生活水準を維持発展させていくための不可欠な収入源を提供した。第8章「ロッジと定期市——シェルパの村の変容」は、そうした変化が村に住むシェルパ達に与えた影響を、人々の日常生活のあり方の変化についての観察に加え、定期市の商品や参加者の構成に関する細かなデータを元に具体的に分析したものである。政府や国際機関、NGO等による開発事業の影響や、主要な観光地からは離れたロールワリンにおける、観光化の影響の異なった現れについても論じられている。

「シェルパ」の仕事がカトマンズを起点に行われるようになるにつれ、1970年代にはまとまった数のシェルパがそこに定住するようになった。第9章「カトマンズのシェルパ社会——都市における戦略」が取り扱うのは、このネパールの首都におけるシェルパ達の活動である。ある程度の学校教育を受けたシェルパの子供達は、「シェルパ」に限らず多様な職業に進出し、都市的な生活習慣を身に付けていく。だが、国際的な知名度にもかかわらず、ヒンドゥー王国ネパール全体から見れば、シェルパは相変わらず辺境の仏教徒の少数者に過ぎない。こうした状況においてカトマンズのシェルパ達は「シェルパ・サービス・センター」を設立し、都市における

儀礼の場を確保するとともに民族集団レベルでの組織化を行うことに成功した。より民族主義的主張を鮮明にした「ネパール・シェルパ協会」も設立された。他方「シェルパ」という語は、観光の現場を中心に利用価値の高い名称であり続けている。第10章「シェルパとは誰のことか——シェルパ化とその背景」で扱われる「シェルパ化」とは、1991年の国勢調査に典型的に見られるように、従来そう名乗っていなかった人々がシェルパを名乗るようになることである。鹿野は、1920年代のダージリンでも生じていたこうした現象から、民族集団を固定化した実体と捉える見方を疑問に付し、シェルパ社会に従来存在していた同心円状の民族の構造と、さまざまな人々によるシェルパの名乗りとその文脈性の双方を視野に入れた、より動的な民族集団把握の必要性を主張する。近代化しグローバル化したネパールの現状において、シェルパが経済的社会的に上昇し安定した地位を得ようとするれば、観光関連産業において「シェルパ」が培ってきた「伝統」（「忠実な東洋人」たることばかりではなく、例えば「真のチベット文化」の担い手たることも含まれる）に頼るのが最も確実で現実的な戦略となっている。第11章「近代化と伝統——エピソード」で、伝統と近代のこの一見逆説的な接合と、そこにおいてさまざまな「伝統」を創りあげてきたシェルパの対応のあざやかさを再度指摘して本書は終わる。

### III

以上の要約からも窺えるように、本書は明快な論旨と展開を持った第一級のモノグラフである。内容は鹿野の長期にわたる研究をふまえたもので、すべての章が全体の構成に沿って新たに書き下ろされている。専門外の読者でも容易に読めるよう各章の冒頭に具体的な状況を示す印象的な文章を配する等の配慮が尽くされているが、議論を一般向けに簡略化することはしていない。ただ、参考文献がごく基本的なものに絞られていることと索引がないことは、本書の学術書としての質の高さを考えると残念である。

先行研究との比較で言うと、本書の第1の特徴はその包括性にある。確かに、近年の人類学的シェルパ研究では、シェルパと登山や観光との関係が論じられるようになった。だが、鹿野も引用するAdams (1996) や Ortner (1999) が、主にそうした関係がもたらした文化的諸現象をミメシスやプラクティスに関する理論から分析するのに対し、鹿野は生態と生業の分析から始め、登山や観光とのかかわりのもたらした多様な影響を、それを被る社会の側の問題も含めて俯瞰する。文化や儀礼にかかわる記述は相対的に少ないが、その内容はシェルパに関する先行研究を知る者にとって十分に説得的である。一冊でシェルパの20世紀を具体的にバランスよく概観している点で、本書はここ20年ほどの間に英語で出版された文化人類学者によるシェルパ研究書と並べてみても最高水準のものだと評者は判断する。

記述の包括性は、シェルパを常にその多様性において議論するという本書の第2の特色に結び付く。鹿野は、トゥーリスト・エリアとして有名なクンブのみでなく、標高の低いソルや研究の少ないロールワリンの記述を織り込むことでシェルパの地理的多様性を具体的に示し、社会内の階層差や世代差にも注意を払っている。人類学者と登山家や観光客の双方にまま見られた、シェルパなるものの存在を前提としてその社会や文化や性格の特徴を見出すという構え、自分の知る特定の地域や時代のシェルパをシェルパの実体そのものであるかのように描く態度は、本書では徹底的に避けられている。シェルパと「シェルパ」のずれの通時的変遷、シェルパの成員の範囲や構成原理の流動性と内部における文化的社会的差異、そして近年のシェルパとしての自己主張の多様性とシェルパ化の現象といった興味深い論点のそれぞれにおいて、鹿野は近年本質主義として批判される構えをそれと名指さずに巧みに回避しつつ、シェルパと「シェルパ」について多くの事実を読者に伝えることに成功している。

勿論、本書の記述に疑問を感じる点が皆無だというわけではない。常に悩ましい現地語の表記の問題を措くと、例えばマナンバとニシャンテが、言語的にはチベット系とは言えない単一の人々を指す2つ

の名称であることは本文からは読みとれない。また、インドにおけるジャーティの概念が理念としては「部族民」を含まないという議論は、ヒンドゥー教徒とその外部の境界が常に明確だという前提に基づく、時代的文脈の限定なしには危険な断言であり、鹿野自身のシェルパ範疇に対する批判的な姿勢とも一致しないものである。

本書全体との関係でより重要な点として、近代の荒波にさらされながらも限定された状況下でそれに対応し、したたかに生きてきた人々という図式の問題がある。こうした図式が、現地社会が外部からのさまざまな影響によりただひたすら破壊されていくだけではないことを示すために用いられてきた意義は認めるが、現時点で問われるべきはむしろ、限定された状況自体と、「対応」や「選択」なるものの内実の方であるはずだ。勿論、単純な利潤追求モデルに還元されない人々の選択と、そこにおける状況拘束性をどう論ずるかは、いまだ到底解決されていない論争中の問題である。鹿野は本書の中で近年の文化人類学界における議論に触れることを一貫して禁欲しているが、例えばシェルパ側の文化的な枠組から「シェルパ」としての雇傭を説明する先行研究に対する彼の批判には、構造と歴史と行為に関する過去20年の人類学的議論の反映を見て取ることができる。加えて如上の図式の問題点は、それに到底還元できない本書の記述の豊かさの前では些事に過ぎない。時に見られるかつての登山家に対する厳しい言葉も、かつて類似の状況の中に身を置いた鹿野自身がかわらざるを得なかった、上記図式に収まりきれない現実を反映するものであろう。

#### IV

本書は、ヒマラヤ地域や登山史に興味を持つ人々のもとより、高山地帯における生態と生業、伝統交

易、観光化と文化・社会変化、都市におけるコミュニティの再構築、さらにはエスニシティや村レベルでの近代化の諸相といった主題に関心のある研究者に、興味深い事例研究を提供するものである。しかもこれらの主題が全体として、国家への包摂や商品経済の流入といった論点とも重なりつつ、20世紀という時代において世界各地で異なった布置をとって現れたさまざまな問題が、互いに絡みあいつつ歴史的に展開していく様の、ひとつの「なかなかにあざやかな」事例として呈示されている。例えば、従来「シェルパ」となることの少なかったロールワリンの人々が近年高地ポーターに多く就業するようになり、豊かな商人が仏間に金をかけ寺院に寄付するとともにより正統的なチベット仏教徒を目指し、都市に出て近代教育を受けた世代の中から自らのシェルパ・アイデンティティを最も強く主張する者が現れるといった現象の指摘は、近代化する語で一括りにされてきた現象をフィールドの具体的状況から考えてきた研究者に、自らの経験との関係でさまざまな思考を促すだろう。この点で本書は、他地域・他分野の研究者にも開かれた、優れた民族誌だと考える。本書が多くの読者に読まれることを希望している。

#### 文献リスト

- Adams, V. 1996. *Tigers of the Snow and Other Virtual Sherpas: An Ethnography of Himalayan Encounters*. Princeton: Princeton University Press.
- Ortner, S.B. 1999. *Life and Death on Mt. Everest: Sherpas and Himalayan Mountaineering*. Princeton: Princeton University Press.

(東京大学東洋文化研究所助教授)